

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中嶋 章浩
論文担当者	主査 芳川 浩男
	副査 竹島 泰弘
	副査 若林 一郎
学位論文名	Ten-year follow-up study of Japanese patients with obsessive-compulsive disorder (本邦における強迫症患者の10年間のフォローアップ研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究では、強迫症 (obsessive compulsive Disorder: OCD) 患者79例に、国際的に標準化された治療を10年間継続的に行い、初診時の強迫症状の内容や重症度は、Yale Brown Obsessive-Compulsive Sscale (Y-BOCS)を用い、この評価を1年ごとに継続した。治療開始10年後における各患者の状態は、Y-BOCS得点によって評価し、三群(完全寛解群、部分寛解群、治療無反応群)に群別した。そして、初診時の背景や臨床的特徴、コモビデティ、抑うつ症状や不安症状の重症度などについて群間比較を行った。結果は、平均Y-BOCS総得点は、10年間の中で経時的に減少し、最も顕著な減少は初診から初診1年後でみられた。完全寛解者の累積寛解率を生存分析により算出した結果、初診から2年で0.05、4年で0.34、6年で0.48、8年で0.54、10年で0.56と完全寛解に至る患者の割合が年々増加していた。本研究の最終評価時には、完全寛解者が48%、部分寛解者が37%であった。不良な長期予後を予測する因子として、発症年齢が低いこと、初診時のGAF得点が低いこと、溜め込み症状の存在、さらに強迫症状への家族の巻き込み行動が存在すること、ASD傾向が高度であることなど、いくつかの因子が特定された。初診時のGAF得点と1年後の改善率、さらに巻き込み症状の存在が、寛解を予測する因子として特定された。特に、治療開始1年後の改善率の高さが、10年後の良好な治療転帰を予測しうるものであることが明らかになった。これらの結果から、本研究で特定された予後不良因子は欧米の先行研究と概ね一致し、OCDの長期予後が、社会文化的背景の相違に関わらない、超文化的で本質的特性を有するものであることが判明した。本研究は強迫症の病態や治療にも繋がる知見であり、学位授与に値する内容と判断された。</p>	